



JUDGEMENT

scene-3

鳴海はるか

天使との戦いの後。

フルーレは天使を撒いて、上手く菜奈を連れて館まで戻ることができた。

だが現状はどんどん悪い方向へと進んでいた。

素人がぱっと見ても、菜奈の具合が悪いのは分かるだろう。

実際、菜奈の顔面は蒼白で、脈も息も今にも消え入りそうなほど弱々しかった。

「こんな時、治癒の魔法が使えれば・・・。」

元来考えるよりも体が動くタイプだったフルーレは、残念ながら治癒の魔法などは習得していなかった。

今までも必要なかったし、攻撃される前にこちらから攻撃を潰せばいいものだと思っていたからだ。

だが、今回はそれが裏目に出た。そしてその自分の考えに、怒りすら感じていた。

「くそっ、これは俺のせいだ。何であそこに菜奈を連れて行った？何でもっと早く異常に気付かなかった？」

自分の至らなさに腹が立った。しかし、無常にも時は動き続ける。

時が経つのに伴って、どんどんと菜奈の体は冷たくなっていった。

ベルフェに聞けば何かいい方法を知っているかもしれない。確か治癒魔法も使えたはずだ。

しかしこの場にはベルフェはいないし、現在魔界にいる彼と連絡を取る術も持たない。

その時、フルーレの記憶の片隅に引っかかるものがあった。

魔族の血を飲ませれば、傷が治る場合があると。

ただし、これは魔族同士の話であって、人間に対して行った場合にはどうなるのか分からない。

ひょっとしたら拒絶反応が起こって死んでしまうのかもしれない。

フルーレは菜奈の脈を取ってみた。――脈がほとんどない。

心臓の鼓動も止まる寸前だった。

このままではどちらにしても菜奈は死んでしまう。

「・・・やるしかない。」

フルーレは自分の手首を切ると、溢れ出す血を口いっぱい含んだ。

そして、口移しに菜奈へと飲ませる。

「これであとは・・・運に任せるだけだ。」

フルーレは菜奈の様子を見る。――変化がない。それどころか徐々に生命の鼓動は弱くなっていく。

「くそっ！起きろ菜奈！お前また俺と飯食いに行く約束しただろ！？約束破る気かよ！」

フルーレは今にも消え入りそうなその体を抱きしめた。それが意味のないことだと分かりながらもそうしないではいられなかった。

そのとき空中に異界と人間界をつなぐゲートが現れた。

中から現れたのはベルフェ。魔界から帰ってきたのだ。

「フルーレ？何があったんですか？」

ベルフェがすぐにこの場の異常な雰囲気を感じてフルーレに問い詰める。

「菜奈が神との戦闘で重症を負ったんだ。もうすでに呼吸も止まりそうになっていたから俺の血を飲ませた。でもまったくきかねえんだ。何か手はないのか？」

「ふむ。そこまでやったのならば後は再生の呪文を唱える必要がありますね。これは血を与えた者がやらなければ効果を発しません。あなたは菜奈の胸に掌を当てて集中し、私が詠唱する呪文を復唱してください。」

フルーレは黙って頷くと菜奈の胸に掌を置いた。

「イヨー・コ・カ・ニー・チヤー。この者に再生の力を与えよ。サナト。」

ベルフェの言うとおりにフルーレが復唱する。ボウツとした光がフルーレと菜奈の体を包む。

「ゲホッ、ゴホッ！」

菜奈が咳き込みその口から血が飛び散る。

「おいベルフェ、本当にこれであってるんだろうな？」

フルーレが菜奈の体を抱きかかえながら問う。

「問題ないはずですよ。肺かどこかに詰まっていた血を吐いただけでしょう。呼吸や脈は戻ってきていませんか？」

フルーレが確認すると、それらは間違いなく戻りつつあった。

「ああ、ちゃんと呪文の効果は出ているようだ。でもこの呪文は即効性じゃないみたいだな。何でだ？」

「即効性のある呪文ももちろんあります。ただ、即効性があるということは術者の方にもそれ相応の見返りを必要とします。今回は菜奈さんには悪いのですが休養を取ってもらって、フルーレ、貴方の消耗を避けたかったのです。」

フルーレは菜奈の体をそっと横たえると立ち上がった。

「ああ、菜奈の仇はとってやるぜ。百倍にして返してやる。」

だが、部屋を出て行こうとするフルーレの肩をベルフェの手がつかんだ。

「いえ、おそらく向こうはこちらが出てくるのを予想して待ち構えているはず。一時の激情に任せて突っ込むのは得策ではありません。それに少しばかり貴方に話しておくことがあります。それに――」

ベルフェはそこで話を一度きり、床に横たわる菜奈を見た。フルーレもその視線につられて菜奈を見る。

「傷付いた女性を固い床に横たわせたままにするというのはどうしたものかと。そうは思いませんか？フルーレ。」

「・・・そうだな。ついカッとなっちゃった。とりあえず菜奈をベッドまで運ぶか。」

フルーレはベッドに菜奈を寝かせるとベルフェの元へ戻ってきた。

「んで、話ってなんだよ？」

「今回私が魔界に帰った目的なんですが、先日の件でいろいろと気になったことがあったのです。」

「先日って言うとなに天使を菜奈が殺ったときのことか？」

「そうです。正確に言えば、それと私たちが初めて出会ったときも含みますが。」

「なるほどな。菜奈は普通の人間とは何か違うもんな。」

「そうです。私は奈々さんの能力に大きな違和感を抱きました。あの力は人間を遙かに凌駕している。」

「つーとあれか？菜奈が実は神か悪魔だとでも言うのか？」

「その可能性を感じたから私は魔界で調べ物をしてきたというわけです。そして魔界で得た知識と戻ってからの状況を鑑みるに、ひとつの結論に辿り着きました。」

ベルフェは一息つくと残りの言葉をつむいだ。

「菜奈は神か悪魔の血を引いた人間なのではないか、と。」

「神か悪魔と人間のーフってということか？」

フルーレが驚きの声を上げる。無理もない。そういった形での神や悪魔と人間の接点は滅多にあることではない。

「ーフではないにしても、隔世遺伝で彼女の能力が開花したのかもしれませんが。そうであれば神や悪魔ほどではないとしても、天使くらいなら相手にするのはそう難しくはないでしょう。」

「なるほどな。そうだとすると今までのあの戦いぶりも納得できる。」

「それに今回のことが決定打となりました。」

ベルフェの言葉にフルーレが怪訝な顔をした。

「今回のことってお前、魔界に行ってたから状況知らないだろ。俺はまだ説明してないぜ？」

「いえ、貴方から詳細は聞いていませんが決定的な一言を聞きました。それと彼女の状況、あれも決定的なものです。」

「俺そんな決定的なこと言ったか？それに菜奈の状況って言っても、神にやられて瀕死の重傷負ってただけでそれ以上のことは何もなかったぜ？」

「それが、実はキーワードがあったのですよ。フルーレ、貴方は自分の血を彼女に飲ませた、と言いましたね？」

「ああ、確かにそう言ったな。」

「フルーレは知らなかったようですが、神や悪魔の血を人間に与えると人間の肉体では耐えることができずに命を落としてしまうのです。」

「え、それマジで？菜奈がもし人間なら死んでたってことか……。」

「そしてもう一点。神からの攻撃を受けて菜奈が重症を負った。ここにも重要な事実があるのです。」

「いや、それは不意打ちをもろに喰らったからだろ。」

「フルーレ、よく考えてください。人間と言う生き物は他の生物とは比較にならないくらいの知能を持つ代わりに、人間界では肉体的にもっとも脆弱な存在です。対して神や悪魔と言うのは、人間とは比べることもできないほどの肉体を有している。」

「やっと理解できたぜ。もし菜奈が普通の人間だったらあんな傷じゃすまないってワケだな。」

「その通り。もし普通の人間ならば一撃の元で跡形もなく吹き飛んでいたでしょう。それでは今後のことについて話し合いませんか。」

ベルフェがソファに座るのに合わせて、フルーレが対面のソファに腰掛ける。

「それでは、私のいない間に起こったことを聞かせていただけますか？」

フルーレが今回の事件の事をかいつまんで説明する。それをベルフェは時折相槌を打ちながら聞いていた。

「……とまあ、ざっと話すとこんなとこだな。」

ベルフェは顎に手を当て思案していたが、やがて口を開いた。

「ここ日本では第二次大戦以降は神側による大きな攻撃はそれほどありませんでした。少なくとも天使が干渉はしてきても、神の姿までは確認されていません。それが今回は確認された。そこ

が重要なポイントですね。」

「ああ。ひょっとしたら俺たち悪魔側の手が薄い、この日本をターゲットに選んできた可能性があるな。」

「その可能性があるのは否めませんね。とりあえず今の私たちにできることは、神によるこれ以上の干渉を防ぐことです。」

「だな。ただ、後もう一つ考えておかないといけないことがあるぜ？」

「菜奈さんのこと、でしょうか。」

ベルフェの言葉にフルーレは無言で頷く。

「俺本人の考えだけどさ、菜奈をこれ以上、巻き込むのはかなり危険だと思うんだ。菜奈の力がハーフか隔世遺伝だかは知らないけど、それは俺たちのような純血の悪魔に及ぶ力はないはずだ。今回は何とか助かりはしたけど、次はこううまく行かない可能性が高い。だから、これ以上菜奈を俺たちに関わらせるべきじゃないと思うんだ。」

「同感ですね。菜奈さんをこれ以上われわれに関わらせてしまうのは、得策ではないと思われまます。奈々さん自信が危険なだけじゃなく、敵にも利用されてしまう恐れがありますからね。ここは奈々さんの記憶と能力を封じて私たちと知り合う前の状態に戻してもらいましょう。ただ念のために使い魔だけは付けておいたほうが良いと思いますが。」

「よし、そうと決まれば今すぐ実行するか。菜奈が目覚める前の方がいいだろ？」

「・・・家、明日の朝まで待たう方がいいかと。治癒の魔法が聞いて治りきるのに明日の朝くらいまでの時間が必要でしょう。今すぐ菜奈さんの能力を封じると、治癒の魔法の効力を阻害しかねません。」

「なるほどな。じゃあ今日はそろそろ休むとするわ。ついでに一応菜奈の状態も見てくる。」

「いつものことながら貴方は正直じゃありませんね。ずっと菜奈さんのことが気になっていたのでしょうか？」

「ば、馬鹿言ってるじゃねえよ。べ、別にあいつのことなんかなんとも思っていないんだからな！」

わざとらしく足音を立てながら部屋を出て行くフルーレを見ながら、ベルフェはやれやれと肩をすくめるのだった。

フルーレは菜奈が寝かされている部屋の前まで来ると、一応ドアをノックしてみた。

予想通り返事は返ってこない。恐らく菜奈が意識を取り戻すのは明日の夕方以降だろう。

フルーレは本音を言えば、菜奈の記憶を消したくないと思っていた。

昨日のことを思い出す。菜奈がくれたポテチ、一緒に行ったハンバーガーショップ・・・それは今までに体験したことのないものを知った喜びだけでなく、違った感覚も彼は感じていた。

「・・・せっかく仲良くなれそうだったのにな・・・。」

フルーレが菜奈の髪を手ですくうと、彼女の長い黒髪はその指の間をさらっと滑り落ちていく。

骨折していた腕を見てみたが、そこはもうすでに治っているように見えた。

「今日はここで寝るか。」

フルーレは一人呟くと、椅子を菜奈の隣に持ってきて座った。

「おやすみ、菜奈。」

フルーレは目を閉じると、そのまま眠りに落ちていった。

フルーレは目を覚ました。当然ながら菜奈はいまだ眠ったままだ。

菜奈はいまだ眠ったままだ。たぶん夕方までは目覚めることはないということだったが、実はこのまま永遠に目覚めないのではないかと想像してしまう。

心配になってしまい菜奈の手をとってみる。温かい。脈もしっかりしている。腕のほうも痣一つなく治っている。これなら胸の傷の方も大丈夫だろう。

そしてしばらくするとベルフェが部屋に入ってきた。

「具合はどうですか？」

「問題ないと思う。あくまで俺の判断で、だけどな。」

「いえ、それで問題ありません。それでは菜奈さんには申し訳ありませんが、記憶を消去させていただきます。夕方くらいまでは目が覚めることはないと思いますが、念のために今すぐ実行したほうがいいでしょう。」

「ああ、そうだな。それじゃあとはお前に任せるぜ。」

フルーレはそれだけ言うと、さっさと部屋を後にする。

なぜか非常にイライラしてしょうがなかった。

ももとは自分とベルフェの二人だけで神を狩っていた。元に戻るだけのことだ。

さて、ヤツも待ち焦がれているはずだ。この前の借りを返さなくちゃな。

フルーレは静かに館を後にするのだった。

繁華街の裏。先日の袋小路にフルーレは来ていた。

「おい、アイネイアース。いるんだろ？隠れてないで出てきたらどうだ？」

フルーレの言葉を合図に、空間に歪みが生じてアイネイアースが姿を現す。

アイネイアースは大仰に辺りを窺う仕草をする。

「あれれ、この間の小娘はどうしました？ひょっとして死んじゃいましたか？まあそれも仕方のないことですね。なかなかの資質を持っていたようですが、所詮は人間。いくら私が手加減しても脆弱な体で受け止めることはできはしないのですから。」

アイネイアースは唇の端をあげてニヤリとした。

「・・・言いたいことはそれだけか？」

「いえ、もう一つ。貴方のような悪魔がいくらがんばっても私に勝ることはありません。今からでも貴方のお仲間を連れて二人で来てください。貴方一人では役不足なんですよ。」

「俺は今機嫌が悪いんだ。それじゃあ俺一人だと役不足か試してみろよ！」

言い切る前にフルーレは地面を蹴っていた。両手に握られた二丁拳銃が火を噴く。だがアイネイアースはその弾道を全てギリギリのところかわしていた。

その姿はまるで踊っているかのようだ。それでもフルーレはどんどんと間合いを詰めていく。

「だから役不足だといったでしょう？次はナイフ攻撃ですか？同じ手は二度も通じませんよ？」

アイネイアースとの間合いは2m。フルーレは拳銃を投げ捨てると、ナイフを取り出した。そしてそれを迷わずアイネイアースの顔めがけて、投げた。

アイネイアースは大仰に体を反らせてそれを避ける。

「ふん、つまらないことをするものだ。想像以上につまらなくてがっかりですよ。」

アイネイアースは心底つまらなそうな顔をしてフルーレに向き直った。しかし、そこにいるはずのフルーレの姿はなかった。

「何！？おのれ、どこへー」

「てめえの後ろさ。」

アイネイアースが驚き振り返ると、フルーレの両手にはマシンガンが握られていた。

「いつの間にー」

容赦なくマシンガンが火を噴く。アイネイアースはかわそうとするが、至近距離からの銃弾をかわすことはできない。

「どうだ、ゼロ距離からの弾丸はよけられねえだろ？てめえは偉そうなことばかり言うだけで隙がありすぎるんだよ！そのうえ拳銃とナイフがただの布石だったことも予想しないなんて、どんだけ頭ん中がお花畑なんだよ！」

アイネイアースの体が穴だらけになっていく。もう彼にはもうすでにフルーレの会話に口を挟むほどの体力も残っていなかった。

フルーレはアイネイアースの体を撃ち続け後ろの壁が透けるくらいまで蜂の巣にすると、マシンガンを捨てロケットランチャーを取り出した。

「はっ、俺を敵に回したことをあの世で悔やみな！」

轟音とともに撃ちだされた弾丸は、アイネイアースの体を跡形もなく吹き飛ばしていた。

そして残されたのは静寂。

「まったく、やれやれだぜ。」

フルーレは一言呟くと、その場を後にしたのだった。

時は経ち、日が沈みかけてきていた。

菜奈はいまだベッドの中だ。そろそろ目を覚ます頃だということで、ベルフェがその枕元についている。

フルーレの方とは言う、俺がいてもしょうがないし面倒だから自分の部屋に行くと言ってこの部屋にはいなかった。

「やれやれ、フルーレは正直じゃありませんね。」

ベルフェが苦笑したのとほぼ同時に菜奈が目覚める。

「気が付かれましたか？」

「・・・えっと、私どうして・・・。」

菜奈は落ち着かない様子でキョロキョロ辺りを見回す。それも当然だ。今の菜奈はこの館のことも、ベルフェやフルーレのことも全て忘れてしまっているからだ。

それに対して、ベルフェは至って普通に笑顔で答える。

「貴女が表の道路で貴方が倒れていたのを見つけまして、こちらで休んでいただいていた。軽い熱中症になられていたようですが、気分はいかがですか？」

「そんな、ご迷惑をおかけしてしまっておめんなさい。気分はいいです。なんともないみたい

です。」

「そうですか。それは僥倖です。それでは日も翳り始めますし、お早めに帰宅なされた方がよいかと存じますが。」

菜奈は家まで送ると言われたがさすがにそれは悪いと思い、邸の外門まで間で案内してもらっただけにした。

「本当にありがとうございました。」

「いえいえ。お体をお大事に。」

ベルフェは菜奈の姿が見えなくなるまで後姿を見送ると、門を閉め館の中に入った。

応接間に行くと、もうすでにフルーレはそこにいた。

「菜奈は何事もなくこの邸を後にしました。今更また言うのもなんですが、本当に見送らなくて良かったのですか？」

「・・・問題ない。菜奈は無事に帰っていった。それだけで十分だ。」

フルーレはぶっきらぼうにそれだけ言った。ベルフェのほうに視線を合わせることもなく――。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本作はショートストーリーで月に一度の連載型式で続けていこうと思っています。
現在病気療養のためのリハビリを兼ねての執筆ですので誤字脱字等あるかと思えます。
そういったことや、その他なんでもいいのでご指摘くださるととても嬉しいです。
それでは、次回作でまたお会いできることを祈ってー。

2013年6月1日

JUDGEMENT scene-3

<http://p.booklog.jp/book/68458>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68458>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68458>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ